

## 随 筆

### 山里暮らしの中での雑感

北川 勝弘

はじめに

今年（2016年）も私は、近所の人たちが野菜畑で折々の時期に合わせて取り組む農作業に学びながら、自分の畑で作業に取り入れて“素人栽培”を楽しみつつ、里山ハイキングや里山の案内看板整備、詩吟やその他の活動にも顔を出し、山里暮らしを満喫している。本稿では、私の最近の暮らしを振り返っていくつかのエピソードを拾い上げ、その折々の雑感を書きとめることにしたい。

#### 1. わが家で開いた年金者組合有志の合宿

去る9月上旬、岡崎年金者組合東部ブロック・世話人会有志による合宿が、わが家で開かれた。14名の世話人のうち、2日間とも都合のつく9名が、各自の枕と薄い毛布を自動車に積み込んでわが家に集った。

毎月の世話人会では時間的な制約のため、相談しきれない課題がいくつも積み残しになっているので、いつもより長い時間をとって存分に話合えるよう、合宿形式で懇親会も兼ねた世話人会をもとう、ということになった。その際、一般の宿泊施設を借りると宿泊費が高くつくので、私の妻が「みんな、うちに来て合宿しない？」と、言い出しっぺとなり、一同の賛同を得たのだった。

合宿参加者9名はほぼ男女半々で、60代から80代までの気の置けないメンバー同士。世話人でない私は、懇親会の部だけ飛び入り参加させてもらった。合宿世話人会での主な話題は、「組合東部ブロックの活動内容を、多くの一般組合員にとってより魅力あるものにするには、どうしたらよいか？」など。

世話人会の論議が一段落して懇親会が始まると、缶ビールや酎ハイ、赤ワインが繰り出され、一同の口は滑らかになって、いろいろなおしゃべりに花が咲く。そうした合間を縫って、私たち夫婦は、数日前にようやく完成させたばかりの段ボール製蒸し器を使ってのスモークチーズ造りに初挑戦し、仕上がり具合の如何を皆に確かめてもらった。その結果は、見事に合格！ 余談ながら、その段ボール箱製蒸し器は、私たち夫婦が詩吟の会や里山ハイキングでよく顔を合わせる知人のH氏から、半月ほど前に作り方を伝授されていたものだ。

ところで、東部ブロックでは毎年10月上旬に、わが家を会場にして40人ほどが集まる芋掘り会を開いている。今年はその昼食時のバーベキューで、イノシシ肉を使おう、と世話人会で相談されていた。そこで、合宿2日目の昼過ぎ、所定の議事をすべて終えた世話人たち一行は、捕獲されたイノシシの解体作業を営んでいる猟師のH氏宅を皆で訪問し、バーベキュー用食肉材料として一定量のイノシシ肉を分けて欲しいと伝え、快諾を得た。こうして、世話人会としての懸案をすべて終えた一行は、三々五々、車に分乗して帰路についた。

老年期の仲間たちが、心おきなく夜中まで顔をつき合わせ、年金者組合のより魅力的な活動の在り方を求めて熱心に語り合う様子は、傍から見ていてとても微笑ましい、和やかな雰囲気満ちていた。年金者組合の活動発展に向けた世話人会メンバーたちの熱い思いが、多くの一般組合員たちにうまく伝わるといいなど、私は願っている。

## 2. ウッドデザインパーク建設構想をめぐる見聞

岡崎市東部・額田地域の鍛埜（かたの）町にある旧料亭Mの跡地が、最近、名古屋に本社を持つ建築関係会社Nに買い取られ、「ウッドデザインパーク」として開発された。去る9月はじめ、その「ウッドデザインパーク」を会場にして、木の駅プロジェクト実行委員会が開かれ、私も実行委員の一員として参加した。（「木の駅プロジェクト」については、本誌第50号（2015年）の拙稿を参照）。実行委員会開会に先立ち、料亭敷地内の庭園や建物の見学会が1時間ほど行われた。旧料亭Mは、清流の流れる乙川（おとがわ）沿いにあり、ホテルの舞い飛ぶ6月頃になると、夕食を摂りながら群舞する源氏ボタルが見られることで広く知られていた。立派な茶室や庭園に加えて、数多くの見事な書画骨董類も建物内に収蔵されていて、多くの見学会参加者たちを魅了した。

N社のE会長は、旧料亭M跡地を買収した当初、敷地内にある里山のスギ林を整備（伐採）して、社員用の研修施設を作ろうと考えていたが、スギの副産物として「ウッドタイル」という家壁などの内装材を開発することで、三河地方のスギ材を広く活用する道（可能性）が開けることに思い至った。そこで、この料亭M跡地を「ウッドデザインパーク」とし、地元産スギの良さを全国に発信する拠点として活用する方向に考え方を変更したという。

E会長は、スギを植えてから100年近くもの長い年月にわたり手を掛けて育てられてきた太いスギの樹が、現在、木材市場では1本数千円という極めて低い価格で取引されていることを知り、直感的に「それはおかしい！」と感じたそうだ。私もまったく同感である！

ウッドタイルは、美しい木目を持つ天然のスギ材を使って作られた、壁材や床材など、家の内装材としていろいろ活用できる、木質の素材である。「簡単に施工できる木の壁紙」というキャッチコピーで、これから全国的に売り込みをはかろうとしているようだ。これに対して、これまで木の駅プロジェクトで取り扱われてきたスギやヒノキの間伐材は、用途が紙の原材料となるチップにされる。ごく大雑把に比較するだけでも、木の木質部を細かく粉碎してチップにする使い方と、内装材という建築用材の一環として木質自体を活用する使い方とでは、後者の方が、生産材の木質部を有効に活用する割合が著しく高くなり、収益性の点でも生産者にとってはるかに有利になる。

我が国の森林環境は、今日、間伐遅れが全国的に深刻化し、林地の崩壊すら起きている。その状況を立て直すには、国産材の需要を伸ばし国内の林業生産量を拡大することが必須の課題だ。N社による三河スギを使ったウッドタイルの商品化は、国産材需要を伸ばすうえでの一つの大きなきっかけとなることが期待される。私もそれをおおいに期待している一人である。

### 3. ベートーヴェンの「第九」合唱との出会い

来年（2017年）2月、私は満75歳の誕生日を迎える。人生のひとつの大きな区切りの時期だ。今、その直前の時期にいるが、後々まで自分自身で「良い体験をした」と思えるような、非日常的なイベントに何か取り組んでみたいと、かねがね考えてきた。私は満50歳のとき（1992年）、名古屋大学農学部の同僚教員に誘われて、カナダ北極圏での化石林発掘調査隊に参加した。50歳という人生の大きな区切りの年に、カナダ北極圏で白夜の夏の2ヶ月近くを化石林調査で過ごした体験は、今でも忘れ難い。ところで、老年期を迎えた今の自分の身の丈にあった“画期的なイベント”は何か無いものだろうか？

そんな漠然とした願いを胸に秘めて過ごしていた今春、私は偶然、6月中旬から12月下旬までの毎週1回、ベートーヴェンの交響曲「第九」を合唱する会が練習を始めるので、150名規模の一般参加者を募集する、という内容のチラシを受け取った。ベートーヴェン作曲の交響曲第九番第四楽章“合唱”だ。

岡崎「第九」を合唱する会は、30年以上もの長期にわたって毎年、市民向け発表会を続けてきた歴史ある合唱団である。そのチラシを眺めて、私は直感的に、ドイツ語の歌詞を暗記し、暗譜した曲に合わせてそれを歌うという点が、音楽の基礎的素養に欠ける自分にとっては、かなり高いハードルになるだろうな、と感じた。その反面、半年間もの長期にわたり150名規模の大きな合唱チームの一員として練習を積み重ね、その成果を大勢の人の前で発表するという

チャンスは、そう簡単に得られるものではないだろう、とも私は思った。

そんな惑い以上に、私が入会に踏み切れなかった大きな理由は、練習時間が午後7時からの2時間と遅いため、夜間の自動車運転にあまり自信がない自分には、毎回の帰宅時刻が夜中の10時近くになってしまうことだった。自分の視力が年々衰えてきていることを、私は日頃から折に触れて自覚している。しかし、来年の自分の視力がどうなっているかは“神のみぞ知る”ことではないか。今（今年）ならまだ間に合う！ そう考えて、私は6月上旬の「第九」合唱の初回練習日に、入会手続きをとった。

入会手続きの際、申し込み用紙に自分が所属したい班を記入する欄があり。私は自分の声の高さが「テノール」なのか、「バス」なのか、見当がつかなかったものの、思い切って男声では高めの「テノール」班を選択した。

「第九」合唱の練習には、当然のことながら毎回、譜面帳を持参して臨む。ソプラノ、アルト、テノール、バスの順に記載されている音符について、自分が所属する「テノール」の音符とドイツ語の歌詞に、よく目立つようにカラーマーカーで印を付けておく。ところが、合唱の練習が始まってすぐに、私は大きな問題があることに気づいた。ドイツ語の歌詞が、自分の現在の視力では小さすぎて、よく読めないのだ。音符の方は歌詞よりも大きめなので、五線譜中での音符の上がり下がりや伸ばすべき音符の長さは、辛うじて見える。こうなると、ドイツ語の歌詞を一刻も早く全て暗記する以外に、打つ手はなさそうだ。泣き言を言っても始まらないから、ここはひとつ、腹を据えて取り組まなければならないなど、改めて覚悟をきめた。

従来自分なら全く思いもよらなかった、合唱の練習という新しい挑戦について、私はこれまで何とか参加し続けている。「合唱」に参加することは、野外で身体を動かしながら参加する諸活動とは全く趣の異なる、私にとっては貴重な“文化活動”イベントの一つなので、途中で気力が萎えることなどないよう、一層努力しようと思っている。

#### 4. 認知症についての雑感

昨年末に、長年、認知症を患い、東京都内の特別養護老人ホームに入所していた義母が、93歳で亡くなった。50歳代半ばで私の父と再婚し、18年後の70歳代はじめに父を見送ったが、気丈な方で、父が亡くなった後もずっと東京都内で一人暮らしを続けた。その義母が認知症ではないかと私たち兄弟3人が気づいたのは、彼女が80歳代の前半期のこと。医師会の診療センターで義母の脳を検査してもらい、典型的なアルツハイマー型認知症と診断された。すぐに地域

包括支援センターと連絡をとり、週に数回のヘルパーによる朝食準備サービスを受けられるようになり、一年後には週に数回のデイケアセンターへの通所が認められるようになった。

その義母が88歳だった今から6年前、今でも忘れられない事件が起きた。食欲旺盛な義母は、夜中に空腹を覚えると、食べ物を求めて部屋中を探し回る習性があったようだ。2月のある朝、義母の朝食準備に訪れた女性ヘルパーが、調理した朝食を義母の部屋へ運ぶ途中で仏間へ入った時、小さな白く細長い石ころ状の物体が畳の上にちらばっているのを発見した。その傍に骨壺が転がっていたので、彼女はすぐに石ころ状の物体の正体が人骨だと覚（さ）った。

実は、その人骨の主は、義母が父と再婚した時期より数十年も昔に離婚していた、前夫の遺骨だった。複雑な事情があり、関西地方に住む私の従兄宅に長年預けられていた当該の骨壺を、義母のもとに返して欲しいと、私はその半年ほど前に従兄から電話連絡を受けたため、弟と二人で東京へ持ち帰り、義母の住む家の仏壇の横に置いておいたのだ。

当時88歳で認知症の義母には、人骨と菓子との区別がつかなかった、という点に、私は大きな関心を持った。義母が骨壺の中身を全てばら撒いたということは、他に何か食べられる物がその骨壺の中に入っているのではないかと、探ったのではなからうか。もしも、そうだとすれば、義母の脳内での菓子の記憶とは、一体どのようなイメージのものとなっていたのだろうか？

ところで、私は最近ある雑誌で、認知症の最新研究に関する講演要旨を読む機会があった。認知症の代表例であるアルツハイマー病を取り上げ、その治療法と予防戦略について触れた論考だった。タウ・タンパク質の重合など、発症メカニズムに関わる専門的な解説箇所は難しかったが、結論的に「発症予防の可能性」について触れた箇所は、私が今後の（老境の）生活設計を検討するうえで、参考になりそうだと感じた。

「脳に病変が生じて、認知症を発症することなく何とか持ち堪えることができる、個人個人に備わった脳の“体力”のことを「認知予備能」と呼び、この認知予備能を大きく育てる生き方を心がけるとよい、と著者はいう。

「認知予備能と最も関連があるものに、教育と学習がある」そうだ。「子ども時代の教育が老後の認知機能に極めて重大な影響を与える」という既往の知見を踏まえて、著者は老年期の私たちに対し、「一生涯を通じて学習し続けることはできるし、脳は年を取ってからも発達し続ける可能性がある」と、励ましてくれる。また、「脳を良い状態に保つためには、バランスの取れた食事、規則正しい生活、適度な運動、良質の睡眠が大切」との指摘は、素直に納得できる。



最後に著者は、「認知予備能を大きく育てるために、一生涯楽しく学び続けてください」と、読者に呼びかけている。私はこの論考を読んで、これからも里山暮らしを前向きな姿勢で続けていくことに声援を送られたように思う。

## 5. 旧友との時ならぬ仏教談議

今年の1月末、私は東京で高校時代のクラスメート、S君とK君の両名と再会し、「ミニ懇話会」の形で旧交を温めた。世間話が一段落ついた頃、S君がK君と私に、きちんと製本された100頁近い厚さの冊子を贈呈してくれた。彼が通っている私立大学の大学院で、これから旬日の後に「文学研究科インド哲学仏教学専攻」の審査会で審査を受ける予定の、彼がこの2年間をかけて取りまとめた修士学位論文だという。私が日頃過ごしている世界とは全くかけ離れた分野についての、極めて高尚な内容の研究論文だ。

仏教は、周知の通りインドで成立した宗教で、現在、原初的・正統的のみみなされる「長老派」と、比較的后世になって発展した「大乘」の、二大潮流がある。S君が取り上げた研究論文のテーマは、大乘仏教の経典のうちで重要な一つの経典を取り上げ、サンスクリット語（梵語）原典と三種の漢訳とを比較検討し、当該経典の構成と思想の特徴を明らかにしようとしたもの、という。

70歳代になってから大学院に社会人入学し、インド哲学について研究の取り組みを始めたS君の人生的な気宇の素晴らしさに、K君も私もほとんど感じいった。「インド哲学の研究を始めようとした君の率直な思いを、何かエッセーの形で書いて我々に読ませて欲しい」と、K君も私も、S君に頼んだ。

旬日の後、S君の論文審査が終わった頃合いを見計らい、私たちはメールを通じて、S君の論文内容に触れた感想や意見などを、やり取りし合った。そんなある日、私は偶然、本年2月に新刊が発行されたばかりの、仏教に関わる一般書籍を市内の書店で見つけ、早速2人に知らせた。

ワールポラ・ラーフラ著、今枝由郎訳：「ブッダが説いたこと」、岩波文庫。

私は、あのミニ懇話会でS君たちと仏教について論議しあわなかったなら、おそらくこのテーマの書籍に関心を払うことはなかったと思う。S君の論文執筆の目的は、学問的に重要な仏教経典の歴史の変遷に関わる専門的な検討、という点にある。それに対して、私たち一般人が仏教について知りたいのは通常、「仏教の教えとはどのようなものか？」を、わかりやすく解説した「仏教概論」ではなからうか。その点で、本書について訳者は「あとがき」で、「ラーフラ師の本書は現時点で入手できる最良の仏教概論である」と述べている。本書を一読して私は、「ブッダが説いたこと」についての理解が深まった、と感じた。

本書には、仏教の特徴のひとつとして、「思想の自由と寛容」が挙げられている。紀元前三世紀にインドを支配したアショーカー王の、仏教に帰依して以降の事績に触れて、「仏教王アショーカーは、(ブッダの) 寛容と相互理解の崇高な手本に倣って、広大な帝国内のすべての宗教を尊重し援助した。」と、紹介している。アショーカー王の現存する石碑の一つには、「人は、自らの宗教のみを信奉して、他の宗教を誹謗することがあってはならない。…他の宗教も敬わねばならない。」と記されているという。本書の著者は、「この共感的相互理解の精神は、今日宗教の分野に限らず、他の分野においても適用されるべき」だと、付け加えている。私は、その考え方に深く惹かれた。

今日、中東地域をはじめ世界中で、宗教の名によるテロや紛争が深刻な事態を齎している。本書の「ブッダの教えと現代」の章には、「現代の国際情勢」に触れた項で、「絶え間ない恐れ、不信、緊張の中にある今日の世界から逃れる道」は、「非暴力、平和、愛、慈悲、寛容、理解、真理、叡智、あらゆる命の尊重、利己主義・憎しみ・暴力からの解放」という、「ブッダが説いた解決法しかない」と説かれている。その良き実例を、私は中米のコスタリカに見る。

日本の平和憲法を模範として軍隊を放棄したコスタリカは、長年にわたる隣国との軍事紛争を無くし、観光立国としての地歩を進め、今や平和裡に社会的発展を実現中の国際的実例として知られる。世界中から貧困を無くす運動を非暴力的な形で進められれば、いつか地球上には平和な環境が齎されるだろう。

## おわりに

田舎暮らしが、いつも楽しい面ばかりでないことは、当然であろう。私は、山村の再生が我が国の屋台骨の再構築につながるものだと考えているが、そのためには、山村地域での高齢化の一路進行を食い止める問題、その点で何よりも重要な、若者が山間地に残って暮らせる就労機会増大の問題をはじめ、環境保全や防災の問題など、取り組むべき課題は数多い。これらの課題に対して、真正面から取り組もうとする意欲を持った若い力の挑戦に、私は期待したい。

昨年来、我が国の社会活動分野でSEALDs（自由と民主主義のための学生緊急行動）の若者たちが大活躍したが、それは世の中を明るい方向へ変えていこうとする積極的なエネルギーが、大衆の間からマグマのように吹き出て来る可能性が広く存在することを示しており、私の期待が決して夢物語でないことを確信させてくれる。ユース・ビー・アンビシャス！（青年よ、大志を抱け！）

（元名古屋大学農学国際教育協力研究センター教授）